

塔とは何か

機能と象徴を通してその思想を読む

[誘導展開型]

服部 真吏（文学部3年）

指導教員：伊藤 行雄

1. 序論

塔とは何か。欧米世界を基軸にした〈tower〉とは何を意味するのか。この問いについて、摩天楼を切り口に再考したい。なぜなら摩天楼は塔と同様に、天を目指して高く聳える建築であるにもかかわらず、これまで塔の範疇に含まれてこなかったからだ。事実、塔研究の権威、マグダ・レヴェツ＝アレクサンダー(Révész-Alexander, Magda, 1886-?)も摩天楼は塔ではないと断言している。

レヴェツ＝アレクサンダーの定義する塔の十分条件とは、高さの欲求であり、本稿でもその塔の定義を前提にしている。だが、レヴェツ＝アレクサンダーの研究は半世紀以上も前のものであり、再検討が必要である。また、摩天楼が塔でないとと言える根拠は明らかにされていない。それゆえ、本稿では「摩天楼は塔である」という仮説をたて、検証していくことにした。

2. 本論

本論は5章から構成されている。まず、第1章では「塔」、「タワー」、〈tower〉の語源や語史を確認し、先行研究において塔がどのように考えられてきたかを紹介する。それら言葉の歩んだ道筋から、〈tower〉が宗教とは区分された出生を持つことを示す。また、レヴェツ＝アレクサンダーの塔の概念(マグダ・レヴェツ＝アレクサンダー『塔の思想—ヨーロッパ文明の鍵—』池井望訳、河出書房、1972。原著は“DER TURM, als Symbol und Erlebnis”1953。)を取り上げ、詳細に分析する。

その後、第2章と第3章では、塔を聖と俗に分け、それぞれの塔が歴史上どのように発達してきたかを概観する。一般的に、塔は教会堂建築の一部と見なされがちだが、教会塔が西欧世界に出現したのは

カロリング・ルネサンス以降であった。もともと西欧の塔は防衛装置から始まり、そこから防衛以外の、住まいや飼料収集などさまざまな機能が与えられ、発達してきたのである。そして塔は、機能を超え、独自の象徴性を持つようになったのだ。

このような塔の歴史を概観した後に、第4章では摩天楼について述べる。特に、これまで摩天楼が塔と考えられてこなかった原因、摩天楼のイメージ形成について言及する。またゾーニング法(1916)以降、ヒュー・フェリス(Hugh Ferriss 1889-1962)によって摩天楼は外形を与えられると、高さを希求するようになり、本質的に塔に近づいていったことを説明する。現実の摩天楼は、経済性や合理性を追求した結果ではなく、非合理的な人間の欲望に従って生みだされるものもあったのである。

そして最後の第5章では、第2章と第3章で述べてきた塔と、第4章で記した摩天楼を合わせて考察する。例えば、教会堂自体が摩天楼になる例や、摩天楼が大聖堂と呼ばれる例、またパラッツォ・ヴェッキオを参照してデザインされた摩天楼を挙げた。さらに摩天楼誕生前夜のジョン・ラスキン(John Ruskin 1819-1900)やルイス・サリヴァン(Louis Henry Sullivan 1856-1924)の建築思想から、摩天楼と塔が同様に上昇指向を持つことを明らかにした。

3. 結論

結論として述べたいことは、摩天楼も塔に含まれるものがあるということだ。

確かにこれまで考えられてきたように、合理性を重視し単なる経済的物件と見なされ、塔とは呼べない摩天楼もあるだろう。しかし、高さを求め、塔の定義に当てはまる摩天楼もある。例えば、1930年前後に現れたチェイニー・ビルやクライスラー・ビル、エンパイアー・ステート・ビルだ。これらは現実的な需要よりも高さが先決されていた。

レヴェツ＝アレクサンダーが摩天楼を塔と見なさない理由に、上昇指向の欠如と、もうひとつ、機能の優先を挙げている。しかし、もともと西欧の塔は防衛から派生していて、機能を除外した塔を考えることは難しい。また、ある建築物が機能的であるか、また不必要な高さを持っているかどうか、という判断は立場によって異なってしまう。さらに、ダゴベルト＝フライの言うように、西欧の塔は中空で、中身が空であることを特徴とするからこそ、さまざまに使用されてきたと言える。塔は時代や場所、文化に応じて、その中身と呼べる部分を変化させていったのである。

だから、教会塔も塔の使用の一形式に過ぎない。キリスト教の勢力拡大に合わせて、「塔」と教会堂建築の関係は密接になっていった。そして塔は教会と同義の意味合いを持つようになってしまった。しか

し塔は本来宗教と別に語られるものであり、塔は高みを目指し、向上していこうとする人間の普遍精神を代弁するものだ。そしてより進歩した技術によって、表現され続けてき形態こそが塔である。だから、塔の中身、塔の中に何があるかという問題は塔の本質に関わらない。つまり、塔の内部でビジネスを行っていたとしても、摩天楼であっても、塔になりうるということができる。